札幌の若山象風さん

書ライブで身近に

「年賀状に筆字は何通ありましたか」―。パソコンで手軽に印刷でき、中高年でも筆を持つ機会が少なくなる中、札幌市中央区の書家若山象風（しょうふう）さん（48）が、縁遠くなった書の世界を身近にしようと、「書のライブ」を繰り返している。自分の作品展や飲食店で、客の求めに応じ衣服や色紙に「作品」を仕上げる気安さが、書への関心をあらためて集めつつある。（石原宏治）

飲食店や作品展で Tシャツ、色紙に気安く

スルスル動く筆が、背中に「愛」の字を書き上げた。無地の黄色いTシャツが、世界に一つのオリジナル品に生まれ変わった。昨年末、忘年会でにぎわう札幌・ススキノの中華料理店に、気迫を込めて筆を動かす若山さんの姿があった。

「好きな言葉『娘の名前』…。客の要望に応じ、一人三分ほどで完成する。出来上がった色紙を手にした男性は「目の前で書家に書いてもらうなんて、すごいぜいたく」と、ほろ酔い加減の顔をほころばせた。

知人から「書道家は、人前で字を書きたがらない」と言われ、「それなら自分は、人の輪に入って書こう」と始めた、書のライブ。それから三年、「まねする人は出てきませんね」と自負する。

料金は出張料の二万円のほか、人数に応じて一人千―四千円。飲食店など、毎月三カ所ほどから声がかかる。衣服に使うのは墨汁ではなく、洗っても落ちない染料用インク。年配の人だけでなく、若い人も興味を示してくれる。若者にはジーンズに白いインクで書くのが人気だ。■

一方で、「書は値段が高い」イメージがある。名の通った書道家に依頼すると、掛け軸が五十万円はずむのが常識という。若山さんも十年前、専門家に「色紙三万円」と評価された。そんな世界に風穴も開けたいるように感じ、とてもうれしいでしょう」■

作品に色を使うのもいとわない。例えば「風」と書いて、仕上げにサッと水色を二刷け塗ると、漢字の分からない外国人でも、視覚で感じてもらえるという。

若山さんの作品をラウンジで常設展示している札幌プリンスホテル「ザ・ハミルトン札幌」（札幌市中央区）の大野修社長は「自由闊達で格式ばったところがない。伝統の世界なのにわが道を行く生き方に、道産子らしいエネルギーを感じる」と話す。

プロになって二十年。食べていくために、結婚式の招待状やはがきのあて名、賞状を書く仕事もしている。今は、道内や広島など九銘柄の日本酒のほか、さまざまな商品のラベルを手がける。道内外のラーメン店やすし店で、若山さんの筆が踊る看板も最近は増えてきた。

目指すのは「普通の女人にほめられるより、普通の人に『元気が出る』『ほっとする』と思ってもらえる字」。床の間がないと飾れない掛け軸ではなく、マンションの壁や玄関に夕ペストリー感覚で自然に掛けてもらえたら、と願っている。

格式に風穴「元気出る字を」

若山さんは自身を「道を外した存在。自分で道を作っていく」と評する。だから「書道家」から「道」を外し、自分なりのこだわりを持って「書家」を名乗る。

後志管内神恵内村生まれ。小学五年の時、学校ぐるみで始めた書道通信教育。以来、特定の師につくことはない。書道団体にも属さない。賞にも無縁だ。

しかし若山さんは「書は日本人の心をくすぐる」と感じる。よくたとえに出すのが年賀状。「百枚来ても、直筆の筆字は一枚あるかないか。でも、心がこもって遠い世界になる人が大半だ。最近はパソコンのキーをたたくだけで、好みの書体を簡単に印刷できる。

客の注文に応じ、布を染めるインクでTシャツに書く若山さん。世界で一つのオリジナル品が誕生する（金田淳撮影）

淡々

昨年夏、NHKのドキュメンタリーで、沖縄の小島でラジオ局をやっている老夫婦の日常が放映された。

その中で、ディレクターが妻に「どんな時が幸せですか」と質問した。妻は少